

(2) 歴史

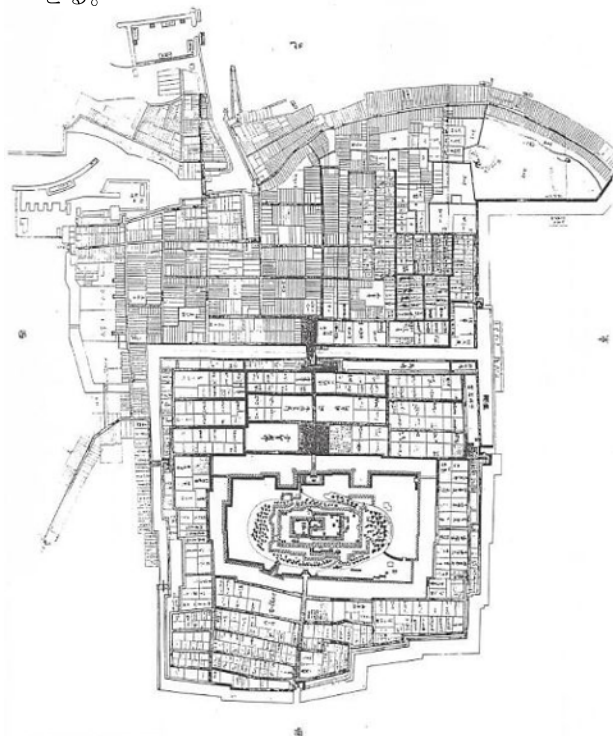
本市ではそれぞれの時代において歴史の物語が紡がれてきた。港と丸亀城を中心として発達した城下町、金毘羅街道などの歴史的道筋、本島町笠島の伝統的建造物群、海運によって栄えた島嶼、さらに社寺林やため池などの人文的要素、これらの景観は本市の歴史と伝統を伝えている。

①城下町を基盤とした都市構造

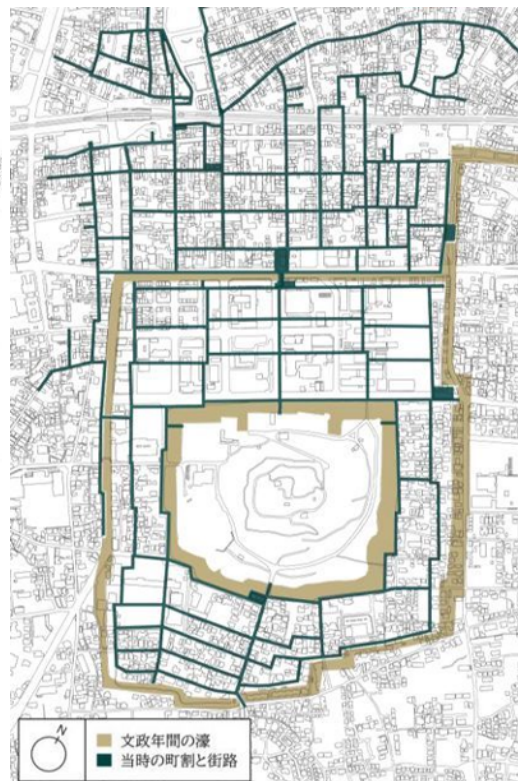
丸亀城は応仁年間（1467～1469年）、奈良太郎左衛門により聖通寺城（坂出市）の支城として築かれた。その後、讃岐を領した生駒正親の手により、西讃当地の要として慶長2年（1597年）修築に着手する。万治3年（1660年）に天守が完成し、寛文10年（1670年）には大手一の門・二の門とその間の枳形が築造され、現在の丸亀城の形となった。外堀の内側である外郭内には一番町から十番町までの武家屋敷長に整然と区画され、町人地・町家は外郭外に配置されていた。

明治になると丸亀城外郭内の一番町から四番町は軍用地として転用され、大名屋敷、武家屋敷などは姿を消した。戦後、軍用地としての利用が終わると公園やスポーツ施設、学校などの都市施設がつけられると共に、外濠の埋め立てが行われた。

このように、丸亀城外郭内は時代の変化に応じて都市機能上重要な施設の受け皿となった。現在では市庁舎やそのほか公共施設が集積し、シビックゾーンが形成されているが、城下町の町割りはほぼそのままであり、丸亀高校周辺では一部武家屋敷が残るなど往時の城下町の姿を感じさせる。



かつての丸亀城下町（文政11年）
（都市景観形成基本計画調査報告書
（1995年）より）



現在の中心市街地と城下町部分との重ね合わせ図
（都市景観形成基本計画調査報告書（1995年）・
基盤地図情報基本項目をもとに作成）

②丸亀の玄関口として栄えた港町

近世の丸亀は城下町として形成され、港を拠点に発展した。近世初期における丸亀港は丸亀城外濠に続く東川口にあり、周辺は旅籠・貸座敷でにぎわった。その後、西川口に福島湛甫が築かれ、さらに金毘羅参詣の全国的広がりによる旅客の増加に対応するため西平山に新堀湛甫が新たに築かれると、東川口は徐々に寂れた。福島湛甫や新堀湛甫の周辺にはかつて東川口にあった旅籠などが移り、料亭や仕出し屋、饅頭屋が立地した。このように、時代ごとに港の位置を変えながら、港を中心としたにぎわいのまち並みが形成されてきた。



かつての港の盛隆を伝える太助灯籠（西平山）



旅籠でにぎわった面影が残る

臨海部には、瀬戸内海や讃岐富士を借景とする大名庭園であり、かつて歴代藩主が茶会や歌会を催した中津万象園がある。丸亀藩主の命により造られ、城下町に近い浜に面して造られた。

近世以降の臨海部は塩田が造成され、本市の産業を支えた。その後高度経済成長期を迎えると塩田は廃止され、臨海部では工業集積が新たに計画された。かつての塩田は工業用地と市民のレクリエーションの場として活用された。周辺には埋め立て事業によって広大な事業用地が誕生し、本市の産業拠点となる。この埋め立て事業に伴い、大型船の航行と出入港できる航路と岸壁が完成し、丸亀港は貿易港として開港する。かつて金比羅参詣客で盛況した港は、本市の産業を支える港として役割を変え、現在の大型船が停泊する港の景観が形成された。



臨海部の工場群と大型船が停泊する丸亀港

③参詣者の往来でにぎわった歴史的街道

丸亀から金毘羅宮へと通じる丸亀街道は、金毘羅参詣道のうちもっとも参詣者が足しげく通り、往来の賑わいを見せた街道である。丸亀港から上陸した参詣者は、本町から通町や冨屋町を通り、外堀から西方に向かい南条町、農人町、餌差町（現、中府町五丁目）、そして城下の出入り口で番所が置かれた中府口（中府門）へと向かった。丸亀街道を縫うように建てられた道標、丁石、灯籠などは今も残っており、信仰の旅の風情が感じられる。このほか、由緒のある神社や仏閣が多く、往時の姿を思わせる古いまち並みが一部残る歴史的街道である。

金毘羅参りのみやげものとして考案されたのがうちわである。金毘羅参りが盛況すると、塩屋町を中心に生産技術が進歩し、本市を代表する伝統的産業となる。丸亀うちわの発展はかつての金毘羅街道の盛況を象徴している。



中府町の鳥居



古いまち並みが一部残っている

④海運を活かした生業で栄えた島嶼

本島は、塩飽水軍、塩飽廻船の拠点として栄えた港町である。中心地には町家形式の住宅が並び、中世の城下町の面影をとどめている。漆喰壁になまこ壁・二階建て土蔵・千本格子の窓などの特徴を有する江戸や明治期の建築物が残存している。



町家形式の住宅が並ぶ



特徴的ななまこ壁

広島県の青木では明治に花崗岩の採掘が開始され、大正末期には「青木石」の名で知られた。採石業の発展を支えたのもまた海運である。島には廻船問屋や丁場と呼ばれる石切り場など海運と深く結びついた生業の景観が残っている。



青木の石切り場



島内に残る廻船問屋（尾上邸）

⑤開拓と水利の歴史を物語る文化的景観

丸亀平野に点在するため池は、水田開発に伴う水不足に対して築造されたものが多く、ため池間やほかの水源が複雑につながることで水利秩序を形成している。本市には約 450（※2）もの農業用ため池があり、この土地に暮らす人々の生業や営みを感じさせる文化的景観を形成している。貯水面積の広いため池は平野部に多く、山麓の谷につくられた池や、島の池には小さなものが多い。

また、近年は独立峰の山を見る視点場としても人気があり、ため池越しに見る讃岐富士の風景などが観光資源にもなっている。

※2 香川県ため池データベース（令和3年4月1日）より



丸亀平野に点在するため池

(3) 活動

本市には城下町の町割りが残る中心市街地、金毘羅参詣の盛隆を感じさせる港や歴史的街道、海運で栄えた島嶼など、様々な時代における人々の営みの痕跡がつくる景観がいくつも見られる。こうした人々の様々な営みとともに、景観の資源を守り未来に継承する活動や場所の文脈を引き継ぎながらも新たな視点から活用する活動などが行われ、現在の景観が形成されている。

■主な活動

①守る

重要伝統的建造物群保存地区の選定（笠島）

昭和 60 年（1985 年）、笠島が重要伝統的建造物群保存地区に選定された。現在は江戸後期の建物が 13 棟、明治時代のものが 20 棟ほど残っている。新しい家もまち並みに調和するよう配慮されている。

②育む

日本遺産 せとうち備讃諸島石の島の認定

丸亀市・笠岡市・土庄町・小豆島町が共同で申請していた、瀬戸内海の備讃諸島をテーマにした「石の島」の物語（ストーリー）が、日本遺産に認定された。

こんびら湊-丸亀街道ゾーン整備事業（平成 23 年～）

「歩いて楽しいこんびら街道」をメインテーマに、歴史文化資源の有効活用と中心市街地の活性化などを目的に整備事業を行った。街道にまつわる云われ等を記した説明板等の情報発信機能の整備、街道のルートを示す舗装の修景整備、休憩機能の整備等を行った。

③つくる

大手町地区 4 街区再編整備事業（平成 30 年～）

大手町地区は、公共公益機能が集積した、本市の顔となる重要なエリアである。街区北側には、市庁舎をはじめとした公共施設が整備された。街区南側には生涯学習センターの跡地や既存の市民ひろばの広場・緑地空間を活かした、「市民ひろば」と一体となったオープンスペースを整備し、本市の拠点の魅力を高め市民サービスの向上に資するゾーンの形成と併せて丸亀城への眺望や動線の形成が予定される。